

鶴見文化財学会報

Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.4
2003年3月25日発行
鶴見大学文化財学会

一芸を身に付けよう、そして二芸、三芸も —私的学芸員考—

岩橋春樹

「いくらか矛盾した言い方かなとは思いつつ、文化財学科の学生諸君にはこのように申し上げたい。一芸を身に付ける・・・学芸員を目指すならば、これだけは誰にも負けないぞという分野を1つ持っていることは、斯界で生きていくために必須の要件である。くじけそうな時には自分自身への励ましにもなる。そして、更なる要望は、一芸だけではなく、二芸、三芸を身に付けるべしというわけである。

二芸はともかく、三芸とは無体ですよと異論も出そうだが、心配は御無用。一芸に通づる者は、他の分野にあっても、そこそこ無難にこなせるはずである。また、そうでなければならぬ。扱う対象が何であれ、実力というものは、物を鑑る確かな眼を持っているかどうかにつきるのだから。これは日頃の鍛錬努力の積み重ねが容赦なく反映する。怠けてはいけぬ。

「仏像彫刻が専門ですから、古文書については分からない」などという者がもし居るとすれば、専門とおっしゃる仏像もまだまだ怪しいねえということになるし、それ以前の論として、博物館現場でそんなことを言っていたのでは仕事にならないのである。時には、実見したこともない作品の図版解説をぬけぬけと書くような荒技ももとめられる。ましてや資格だけが売り物の学芸員先生では何の役にも立ちません。退場願いますと直ちにレッドカードである。

もっとも、学芸員という存在は、ひとつ間違えば器用貧乏の何でも屋であり、それに小手先の知識、テクニクにおぼれやすい。展示や図録制作、写真撮影、あるいは保存修理などの経験、ノウハウ蓄積は学芸員としての

貴重な財産に相違ないし、いざとなれば強力な武器になるのだけれど、所詮それは手段にすぎない。何のためにという肝心のところを忘れてしまつては本末転倒であるということをお戒めもふくめて念押ししておきたい。

とどのつまり、博物館法第四条に「専門的職員として学芸員を置く」とある通り、学芸員とは良くも悪くも「的」付の曖昧職種である。事実、研究職だなどと期待していたら大間違いなのであって、職場の雰囲気に関しても同様に想像していただければよろしい。余談ながら、博物館人には何故か酒飲みが多いのですねえ。したがって、研究に打ち込みたい人種には向いていない。そのための十分な時間はとても得られないし、組織そのものの指向するところも違うのである。

ただし、実物に触れる機会だけはきわめて豊富であり、文化財を肌で覚え、眼力を鍛えるには絶好の場である。自分自身について振り返れば、そのような環境に長らく身を置いて、得たものは計り知れない。こればかりは、まさしく百聞は一見に如かずの喩え通りであり、気障を承知で言うなら、博物館に在籍したことにはささかの悔いもない。1年ほど前に別世界に転じたわけであるが、慣れ親しんだ品々と離れてしまったのは寂しいかぎりというのが本音である。



考古学と文化財学のはざままで

河野 真知郎

昨年鶴見大学では、標記のことを考えさせる出来事が、少なくとも二つはあった。その一つは11月の文化財学会秋期シンポジウムであり、もう一つは9月の中世都市研究会である。

前者の題材となった「板締染め型板」は、私が発掘調査団長をつとめた遺跡から出土したものである。シンポジウムの会場でも発言したことであるが、出土時に見た限りでは、また保存処理のため鶴見大学に運びこまれたときにも、「それが何であるか」わからなかった。正倉院に「頬纈」という技法で染められた布がのこっていることは知っていたが、まさかそれに類する染めの道具とは思いつきもしなかった。

染色史の研究者でも、まさか中世の型板が出土するなんて考えてもいなかったのだから、私のうかつさは責められないと慰めてくれる人も多い。しかし、私自身としては、自分のフィールドである鎌倉から出土する「もの」について、適確な判断と評価を下せなかった自分を責めたい。考古学の授業では「考古学者は“何でも屋”だから、幅広い知識が必要だ」と云っている以上、そうなのである。

ただ、考古学をやっていると目に見えるもののみにとらわれて、永年土中であって消滅したものについての配慮を忘れがちだ。たとえば、鎌倉時代の人々がどんな衣服を着ていたか出土品から証明せよ、と云われても「それはムリムリ」と答えてしまう。しかし、その無いものねだりの問いに、少しでも物言えるよう努めたいと思っている。

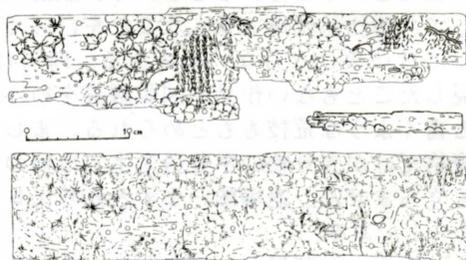
9月の中世都市研究会は、今は亡き石井進先生の置きみやげの学会で、石井先生のゼミ出身の院生が『鶴見考古』第2号に発表した論考が、ちょっとした波紋を呼んだ。鎌倉の若宮大路側溝（または北条氏小町亭の堀）出土の木簡に記された人名に、きわめて有力な比定説が出たからである。それもごくメジャーな文献資料（円覚寺文書）にあったのだ。

歴史時代の考古学は文献史学者と協力するのは当たり前と云われるのに、なぜそんなメジャーな史料に当らなかったのかといえば、それは出土遺構から「鎌倉時代前半」の「御家人」に的を絞っていたからである。「古墳の石室から出土した」といわれたら、誰でも古墳時代の遺物と思いついてしまうのと同じことなのだ（後世の盗掘者の忘れ物ということもある）。

このたびの比定が絶対に正しいかどうかは更なる検証を要するだろうが、遺跡・遺物を考証するには柔軟な姿勢をとらなければと反省させられたの次第である。

ところで話はかわるが、学生諸君が3年次のゼミを選択するにあたり、「自分のやりたいこと」の幅をわざと狭めているような気がしてならない。上記の出来事への私の反省は一考古学徒の立場からのものだが、美術工芸史や文献史の立場の人でも共感を寄せてくれると思う。その点、鶴見大学の文化財学科は、文化財に関与する諸学を横断的に学べる場なのだから、自分の研究テーマを絞り込むことと、学際的な知識や研究手法を援用することを、両立させてほしい。

土曜だからといって秋期大会に来なかったあなた！あなたは損をしているのですよ。



〔板締染めの型板図〕

文化財学会 春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉

講演「流鏑馬の歴史」をきいて

報告 2年 浦出 華代

平成14年度文化財学会春季講演会は、6月1日土曜日に『流鏑馬の歴史』と題して開催されました。

今回は、日本古式弓馬術協会理事長・武田流鏑倉派正統師範でいらっしゃいます金子家堅先生をお招きし、流鏑馬の歴史や馬の種類、西洋馬術との違い等いろいろなお話を伺いました。

流鏑馬は、欽明天皇の御世、国の内外（外は新羅・高麗・百済）が戦乱のため、心を痛められた天皇はこれを平定するに先立ち、豊前国宇佐の地（宇佐八幡の鎮座地）に神功皇后・応神天皇を祀られ、神前で天下平定・五穀成就を祈られ、馬上で三つの的を射たのがその起源であると言われていています。

金子先生は流鏑馬において一番重要なことは、馬との信頼関係であるとおっしゃっていました。流鏑馬は“走る”“手綱を離す”という二つから成り立っているとのことでした。そして、一番の問題がこの“手綱を離す”ことだそうです。西洋馬術では“手綱を離す”ことは、止まれということですが、日本古式弓馬術では、手綱を離されても馬は走り続けなければなりません。そこで手綱を離されても動じないという人と馬との信頼関係が必要なわけです。先生は、馬には人間の心を通じる、その人がしたことを忘れないのだとおっしゃっていました。

日本古式弓馬術は、戦争のための馬術であり、それに対して現存の西洋馬術は、遊び・見た目・スタイルを楽しむものです。良い馬でなくては戦争に負ける、だから良い馬を自分の庭で飼い、自分だけに馴れさせるのだそうです。日本では戦前までは騎兵がいましたが、戦後、軍隊がなくなっからは馬術がなくなってしまい、昭和50年以降は流鏑馬に適した良い馬はいなくなってしまったそうで

す。

私が流鏑馬の馬を見た感想は、西洋馬術の馬は、足がすらっと細く長く、すばやく走るイメージですが、流鏑馬の馬は、足が太く短く、がっしりとしていて、力強く走るように見えました。日本の馬の背は、1m55cmくらい、西洋の馬は、1m60から65cmくらいだそうで、実際には流鏑馬の馬には適さないそうです。

いつ頃から流鏑馬が行われていたのかという明確な記録はないのですが、『吾妻鏡』には、源頼朝が幕臣に訓練をさせ、鶴岡八幡宮に奉納したとあります。現在、武田流では年一回の“放生会”の後に、流鏑馬を行うそうです。

また、式的的は五色の的で、的の後ろには式の花を添えてあります。これは、切腹をした人をいたわって花を添えているそうです。また、「競射」の的として土器二枚を合わせた小的を使用します。

先生は、馬の乗り方から走り方なども、丁寧に説明して下さいました。たくさんのパネルを使い、貴重な写真も見せて下さり、とても分かりやすく教えて頂きました。

先生のご講演後の質疑応答では、普段あまり触れることのない流鏑馬に対して熱心な質問が飛び交いました。

この様に春季講演会は、文化財学科に所属しなければ、知ることのできなかつたかもしれない“流鏑馬”について学ぶことができ、とても有意義な会となりました。最後になりましたが、金子家堅先生、ご協力有難う御座いました。



〈秋季大会シンポジウム〉
「中世の夾纈 ～鎌倉出土の板締染め型板をめぐって～」

報告 3年 中込 健司・吉田 史子

平成14年11月16日土曜日に文化財学科秋季シンポジウムが行われました。今回は鶴見大学文化財学科が保存処理を行った若宮大路遺跡板締染め型板について「中世の夾纈～鎌倉出土の板締染め型板をめぐって～」と題して多くの先生方にご講演いただきました。

はじめに基調講演として、日本女子大学教授の小笠原小枝先生に「若宮大路遺跡発見の『板締染め型板』が語るもの」という論題でご講演いただき、夾纈と板締染めの違いや夾纈の原理や特色についてスライド等を使い説明していただきました。そして型板に描かれている四本懸かりの文様について、中でも桜・柳の形式や様式が鎌倉の雰囲気を与えていると指摘され、また、鎌倉時代における蹴鞠装束にもふれられました。これまでは、この時代に糊染めが発達して使われていたものと考えられており、今回の型板の発見で板締染めのものもあったのではないかと考えなければならなくなったと言及されました。さらに使われなくなった型板は燃やして処分されることが多く、染織において道具の発見は非常にめずらしいことで、染型としては最古の資料であろう、と論じられました。今回の型板がどのようにして今日まで残り、残った型板はたった1枚の断片であるが染織史を考えるうえでどれだけ大きな新しい光を与えてくれたかを思えば、やはりものの発見というものには貴重な情報が多く含まれていると身にしみている、と述べられました。

午後からの関連報告ではまず、本学教授であり板締染め型板の出土した若宮大路周辺遺

跡群の発掘団長を務められた河野真知郎先生より「板締染め型板を出土した遺跡～その時代と性格の考察～」という論題でご発表いただきました。河野先生は、遺跡の倉庫敷的性質や型板の出土状況から、その年代の特定が困難であることを述べられ、また、鎌倉出土の遺物で文様の施されているものを類例として挙げられ、鎌倉期の文様の多様さをご紹介くださいました。

次に、本学教授・永田勝久先生は「板締染め型板の保存処理」という論題で、木製品の保存処理法についてご説明いただき、板締染め型板をPEG含浸法を用いて処理された経緯を述べられました。

続いて、本学非常勤講師であり染織家でもある原田ロクゴー先生からは「若宮大路遺跡発見の『板締染め型板』の染め技法解明」という論題でご発表いただきました。原田先生は、京紅板染めの技法と比較・検討されながら、今回の板締染め型板の厚さや材質に着目され、その染色技法についての推論が展開されました。

最後に、本学教授・関彦彦先生より「蹴鞠の史科学」という論題でご発表いただきました。様々な文献資料から、板締染め型板の文様となった蹴鞠の四本懸かりの木々（桜・柳・楓・松）とその方位が定着した時期は13世紀末であることを述べられ、文献史学の立場から、型板はそれ以降の年代の制作である旨を述べられました。

そして、今大会の締めくくりとしてパネルディスカッションが行われました。本学教授・大三輪龍彦先生を司会に今回講演された5人の先生方を交え、講演内でふれることの出来なかったことや補足説明をはじめ、光華女子短期大学名誉教授の野上先生が京紅板染めとの比較から、本学教授の中里先生が文様の性格などから発言され、活発な議論が行われ、秋季シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。

今回の板締染め型板は、鎌倉市の文化財に指定されました。これからさらなる研究が染織文化史をはじめ、様々な分野からなされることでしょうか。文化財の保有する情報の重要性を改めて知ることとなった今回の大会は、まさに文化財学科に相応しい内容だったのではないのでしょうか。



学会 左見右見

文化財学科に籍をおいて

1年 和田 直子

文化財学科に入学したこの1年は、私にとって非常に充実した年になりました。それは部会やウェブサイト委員会などに所属したことにより、先生や先輩方と交流を持てたからです。私は美術工芸研究部会に入りましたが、そこでは先輩方に授業や研究内容など色々なアドバイスを頂きました。また、年に2回行われる文化財学会の講演会シンポジウムでは、1年生は授業の一貫として参加し、授業ではなかなか味わうことの出来ない先生方の専門的な講演を聞くことができました。このように文化財学科という少数人数ならではの交流の場の多さが、興味の視野を広げる結果となっています。

これは文化財学科の大きな特徴の一つだと思います。私達は文化財学科に何かしら興味を持って入学してきたので、その興味を広げられる環境はとても素晴らしいと思います。しかし、1年生全員が学会・研究部会で十分に活動出来ているとは思えません。もっと活動場所や内容など明確にし、興味のある人全員に参加して頂く必要があると思います。一人ひとりが自分の興味ある研究内容に真剣に取り組んで行くことが、これからの文化財学科をさらに盛り上げていく要因だと思います。

私にとっての文化財学会

2年 瀬戸 希美

私がこの文化財学科に入学して2年が過ぎました。入学したばかりの頃は何をどのように勉強していけばいいのかかわからず、ただ与えられた課題に必死に取り組んでいました。しかし、各授業を通して次第に文化財に対する意識の向け方を学ぶと同時に、文化財に対してのさまざまな切り口を見つけることができました。

また春季・秋季に行われる講演会やシンポジウムでは現在行われている研究の成果などが発表されるので、参加することで現在の文化財の様子を学ぶことができます。また、外部から講師の先生をお招きすることもあり、そのような機会には普段の授業では聞くことのできない分野のお話を聞くことができます。パネルディスカッションなどでは外部の先生の研究分野と、鶴見大学の先生方の研究分野とのつながりを感じさせる一面もあり、ひとつの文化財に対して様々な分野の知識が寄り集まっているということをリアルタイムに

感じることができます。私にとって講演会とシンポジウムに参加することは、普段とは違った刺激を受けることができる貴重な機会です。そしてこのような機会が学生に開かれていることはとても素晴らしいことだと思います。

これからもこのような貴重な時間を少しでも多く自分の知識にし、自分の進む道に役立てていきたいです。そして今後も文化財学会のさらなる飛躍を期待したいと思います。



文化財学会への参加にあたって

3年 浅田 高士

文化財学科が設立されて本年度で5年が経ち、まもなく6年目を迎えようとしています。大学院の後期課程履修生も合わせ、文化財学科は初めて全学年全課程を占めることになり、いよいよ科として充実の時期を迎えることと思います。

鶴見大学文化財学科は、鎌倉というわが国の歴史・文化を代表する地域をバックボーンとし、その研究対象の中心としています。授業ではもちろん、巡検をはじめとする実習でも、地の利を生かせる鎌倉は貴重な存在であると思います。

記憶に新しいところでは、平成11～12年に鶴見大学が受託した建長寺境内の発掘調査でしょうか。この成果はマスコミで大きく報道され、文化庁主催の埋蔵文化財公開普及事業『発掘された日本列島2001—新発見考古速報展—』でも、室町時代に使用された漆塗り膳碗セットなど多くの出土品が展示されました。平成13年度秋期シンポジウムでも成果は報告されましたが、私が1年次に巡検で発掘現場を目にしたこともあり、大変関心を持ちました。

文化財学会は4年目に入り、私自身も春季・秋季の大会を3度ずつ経験しています。ただ、一員

として参加しているというよりは、聴講している感が否めませんでした。最新の研究成果を知るうえでも、もっと積極的に学会に関わっていかねばと思います。また、興味のある研究部会や委員会に参加することも、学会の一員として、起こせる行動のひとつではないでしょうか。私は残すところあと1年ですが、今年からでも興味のある部会に参加しようと考えています。

4年間を振り返って

4年 小代田 由紀子

私は、この4年間一人暮らしでバイトをしながらただ単位を取りに学校に通っていた普通の学生でした。特にこれといった活動もしていなかったし、学問に情熱を燃やしていたわけでもなく、ただ授業をこなしてきただけでした。しかし、それでも私はこの文化財学科で学べたことを今本当に嬉しく誇りに思っています。それは、いろいろな人に出会い、文化財学科にしか出来ない貴重な体験をすることができたからです。その中でも1年時からある実習は私の大好きな時間でした。教授の説明にメモを必死でとりながら文化財を現地見学した巡検、粉々の土器に手惑った出土遺物の整理技術の実習、真夏の暑い中行われた発掘実習、古文書の解説と取り扱い、みんな黙々と行っていた古文書の修復、東北地方の文化財巡検、様々な機器に悩まされた科学分析・保存の実習等々、文化財学科だからこそ出来る実践的な授業でした。1学年の人数が少ないお陰で実習がある度にだんだん輪が広がり、みんな和気藹々とした雰囲気でも楽しかったことを覚えています。

4年間を振り返ってみて一番強く感じたことは、自分の時間をどう使うかということがとても大事なことであったということでした。大学生という時期は、お金もあるし時間もある、沢山のことを自由に出来る、人生の中で一番贅沢な時期といえるでしょう。しかし、人は自由がありすぎるとただ時間に流されて何も出来ない、しないことが多いのではないかと思います。実は私もその一人でした。何かに流されて生きていくのではなく、自分とよく向き合い何かを始めてみるのが大事なのだと思います。このことを私に考えさせてくれたのは、朝早くから発掘現場に行き土や遺構と格闘したり、図書館でこつこつと研究を進めていたり、学会委員として文化財学科のために奔走していたり、部会または部の活動に一生懸命だったり、自分の夢に邁進していたりと4年間一緒に学んできた他でもないこの文化財学科で出会った友人達で

す。そんな友人達と出会えたことを本当に嬉しく思います。そして、この4年間熱心にご指導して下さい文化財学科の誇る知性と個性を兼ね備えた素晴らしい先生方、助手さん、また4年間見守ってくれた両親に感謝の気持ちでいっぱいです。

大学院に進んで

M1 野田 知宏

「君達は研究者なんだ」と言われてからはや1年がたった。私達が大学院一期生の為か、4月当初は学部の延長という意識が強く、言われた言葉の理解もできず、ただ時間を無駄に使っていた。授業内容も学部の授業とは異なり、より専門的で高度な知識が要求される。「このままでいいのか!」と不安がでたのは言うまでもない。そんな頃、関先生から「院生どうして勉強会を開いてみたらどうか」とのアドバイスを受けた。これについては賛否両論あったが、「自分の専門分野以外の分野も知ることこそが、文化財学科にいる意味がある。」という結論に至り、勉強会を行なうことに決定した。これまで「源氏物語」と「貴族趣味」をテーマとして二度行なわれた。院生それぞれが同じ分野ではなく、文献史学、考古学、美術史、保存学を専門としている為、一抹の不安こそあったが、これまで知ることがなかったさまざまなことを学ぶこととなり、良い経験となった。

春には新たに大学院に入って来る人達もおり、いい刺激になると共に、先輩としての自覚も持たなければならない。もうこれ以上の時間的ロスは許されないのだ。2年目を迎えた院生は、それぞれが研究者としての自覚と誇りを持ち、日々の研究に精進していくよう努力している。



研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会の活動は、自分の足で歩き、自分の目で見てその土地の雰囲気や体を感ずる事に重点を置いています。その趣旨から、「江戸を歩く会」と呼ばれ親しまれています。巡検前・後ともに勉強会は開かず、参加した方一人ひとりの心に残り、楽しかったと感じていただければ良いのです。その時の経験は必ず役に立つものだと思います。この点は、当部会の特徴と言えるでしょう。又、巡検には毎回先生に御同行いただき、あらかじめ部会で作成したレジュメを基に学生が説明をし、要所所で先生のお話を聞くというスタイルを貫いています。

昨年2月に品川、7月に博物館研究部会と合同で両国・深川界隈を、10月には2度、大学院の授業に付随する形で、田端・上中里・巣鴨周辺を、計4度の巡検を行い例年以上に大きな成果を挙げる事が出来ました。

本年は、2月に「日本の近代化」をテーマとして品川御台場から旧新橋停車場までの地域を巡りました。つい最近まで発掘が行われていた汐留遺跡は、今や超高層ビルがひしめき合う近代都市へと生まれ変わりました。当地では、遺跡の概要を約4年前の遺跡見学会の様子を踏まえて説明しました。現在、かつてあったその広大な遺跡は駅舎を復原途中の旧新橋停車場周辺のわずかな地域にしか残っておらず、東京という大都市において遺跡を保存する事の難しさを改めて学ぶ事が出来たのは成果でした。全体を通して大変有意義な時間を過ごす事が出来ました。

次年度は3、4回定期的に巡検を行いたいと考えております。我が部会は、参加して良かった、楽しかったと思っただけのような活動を目指しています。巡検には奮ってご参加下さい。宜しくお願ひ致します。

(文責 M1 富川 武史)

鎌倉研究部会

私たち鎌倉研究部会は「文献・考古・美術・文化財科学等の諸分野から中世都市鎌倉を研究し、その姿を明らかにして行く」という御旗のもと活動しています。今年度の活動は、称名寺・金沢文庫・上行寺東遺跡・六浦周辺の巡検一回しか行い

ませんでした。熱心な後輩の人たちが活動を待ち望んでいる状況にあるのに、その期待に応えられなかったことに関してこの場を借りてお詫びいたします。来年度は、これまでのような巡検に加え、部誌の発行、本学の先生による鎌倉学講座など活発に活動していきたいと考えています。

現在本部会は、メンバーが不足している状況にあります。前年度の会報において「誰かにこの研究部会を引き継いで欲しいということをお伝えたいわけではありません（引き継いでくれる人がいるならそれは嬉しい限りなのですが）皆さんに研究部会に参加して欲しいのです。」と書きましたが、実はものすごく引き継いでもらいたい気持ちでいっぱいです。「鎌倉について勉強してみたいな」とか「中世都市について興味があるんだけど」という気持ちのある人は、是非参加しましょう！ではどんなことを研究している人がメンバーにいるのかちょっと書き出してみますと、部長…得宗、部員A…漆芸、部員B…朱、部員C…石塔（以前は朧衣）、部員D…幕府法、相談役…方縦（以前は焼き物）etcという具合です（順不同）。部長はだいたい院生控え室（6号館地下）にいますので、遠慮せず押し掛けて来て下さい。巡検等の活動については6号館地下の掲示板に掲示しますので、興味のある人はチェックしておいてください。鎌倉研究部会を一緒に盛り上げて行きましょう！

(文責 M1 松吉 大樹)



古典芸能研究部会

こんにちは、古典芸能研究部会です。昨年の秋に認可されたまだまだ新しい部会です。この研究部会は、授業等であまり触れることがない無形文化財を肌で体験し、みなで考えていこうというものです。巷では東儀秀樹氏、野村萬斎氏、吉田兄弟といった人達の影響により、日本の古典芸能が見直され、最近では古典曲と現代曲の融合といった形で芸能を表現され、国内外を問わず高い評価

を得ています。しかし、伎楽、雅楽、能、狂言などの芸能は、名前などは知られていても、歴史についてはまだまだ知られてはいません。私達はこういった古典芸能というものを通じて、ただ歴史を学ぶだけではなく、実際体験してみてもいいものを知っていこうというものです。

では、いったい古典芸能研究部会はどういった活動をしているのでしょうか。今年度は、すべての芸能の元となった伎楽、雅楽について学びました。宮内庁式部職楽部の演奏会やその他多くの演奏会にも行きました。体験するという点では、現在この研究部会に参加している人達が、雅楽の竜笛という横笛を嗜んでいる関係で、本学の学園祭で催されていたアジア祭に出演し、舞楽「蘭陵王」を演奏しました。また大三輪先生の御口添えにより、俊基卿祭で葛原岡神社と日野俊基の墓前において雅楽の演奏を奉仕させていただき、僧侶による声明を聴く機会にも恵まれました。来年度は声明と雅楽の合奏と舞楽上演という話もでています。

まだまだ伎楽、雅楽を主体として活動していますが、他の芸能にもチャレンジしていきたいと思っています。

(文責 M1 野田知宏)

日本精神研究部会

日本精神研究部会という名称を聞かれると、何をしているのか謎な部会で本当に活動しているのか？とよく尋ねられます。たしかに日本精神や精神文化という非常に幅広く漠然としていてわかりにくいのですが、この部会では日本の宗教や民間信仰、習俗、迷信などを研究対象にしています。しかし、最近はおっぱら民俗学的内容を取り扱う事が多くなっています。

部員は現在2年生が4名、1年生が4名の合計8名となっています。人数は細々としていますが、堅苦しくない雰囲気集まることができました。活動は月に2回、火曜又は金曜の放課後に図書館のセミナー室や6号館に集まって研究発表などを行っています。

今年度は個人個人が興味あることを調べ、みんなの前で発表する事が活動のメインでした。内容としては賽の河原と地藏菩薩の関係、丑の刻参りやお百度参りの願掛けの日数、東北での即身仏などについてです。発表の進行具合はまちまちでしたが年内に会員の発表を終わらせるという目標はなんとか達成しました。この発表の内容は小さな

冊子にする予定になっています。

これまでの活動が個人で行っていたので、次年度はグループで1つの事を調べていこうと思っています。現段階で持ち上がっているのは各地の伝統的な祭について調べたり、見学にいったり、他には梵字や祝詞についても調べたいと考えています。

また、今年度は国立歴史民俗博物館に見学に行くのみに終わりましたが、次年度はもっと他の博物館や神社、お寺なども見学にいきたいと思っています。夏休みの間に部員でどこかに遠出することも計画中です。

こんな部会もあるんだなと知ってもらえれば幸いです。

(文責 2年 山口朋子)



歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は今年度、鎌倉の切通ツアーとして、朝比奈切通しを訪れました。先輩から朝比奈切通しについての説明を聞きながら、静かな中世の道を後輩とともに味わいました。今回の切通しツアーは朝比奈切通しだけではなく、鎌倉五山の一つの浄妙寺、杉本寺、源頼朝の墓、そして大倉幕府跡も見学しました。大倉幕府跡では某M崎先輩が(このことについて雑誌『鶴見考古 2号』に記載していることから詳しく知りたい方は『鶴見考古 2号』を御覧ください)解説していただきました。同時に学年を越えた交流を図ることもでき、大変有意義なものになりました。

この切通しツアーは今回、3回目です。私たちの部会の恒例となりつつあります。1回目は巨福呂坂や亀ヶ谷切通し、2回目は極楽坂・大仏坂切通し周辺を散策しました。化粧坂と名越坂の二つの切通しには訪れていないので、次年度はこの2つの切通しのツアーを予定しています。また、歴考研の名物は切通しツアーだけではなくありません。昨年

度の冬に行われた鎌倉やぐらツアーも私たち部会の恒例となりつつある企画です。この会報が発行されている頃にはもう今年度のやぐらツアーは終わっていると思いますが、次年度も予定していますので、ぜひ参加してください。

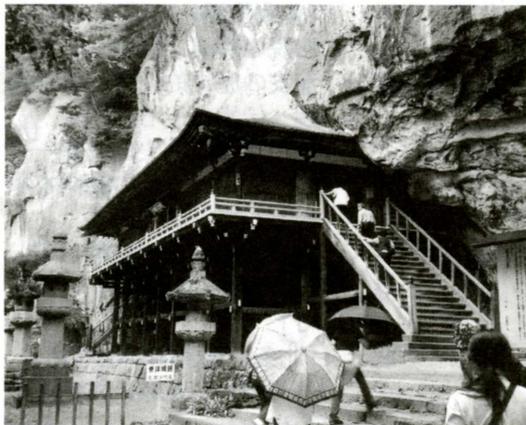
さて、この歴史考古学研究部会も今年度で3年目を迎えることになり、部会の設立に担ってきた部員たちもめでたく卒業する運びとなりました。これからの人生にとってこの大学生活というもの大きな思い出に残るものであり、重要なターニングポイントだと思います。だからこそ、この部会で一緒に思い出作りをしてみませんか。少しでも興味を持ったならば、この部会の活動に参加してみてください。私たちは皆さんの参加を心よりお待ちしております。

(文責 4年 佐々木 英明)

仏教文化研究部会

仏教文化研究部会は、今年度6月に3年生が中心となって発足しました。この研究部会の目的は、日本文化にさまざまな影響を与えた仏教を精神文化・美術・建築・文学などの様々な角度から研究することにあります。活動内容は、博物館や近郊の寺社仏閣の見学などです。

7月、9月、11月の計3回活動を行いました。まず7月は、日本橋三越で行われた「薬師寺展」の見学。9月は夏期休暇を利用し1泊2日で平泉へ見学旅行に行きました。そこで、中尊寺・毛越寺を中心とした仏教建築物を見学し、中世に奥州藤原氏が栄華を築いた黄金の文化を肌で感じる事が出来ました。最後の11月は尾崎先生引率の下、



国立歴史民俗博物館で開催された「中世寺院の姿とくらし」展の見学を行いました。尾崎先生は私達に熱心に色々なことを説明して下さり、普段の授業とは違った形で知識の吸収が出来、よい見学であったと思います。

次年度は、部員のほとんどが4年生ということもあり見学に行く機会がすくなくなってしまうと思いますが、出来るだけ活動していきたいと思います。部の基盤は出来ているので、部を継承し、さらに大きくしてくれる1、2年生がいれば、是非参加してください。お待ちしております。

(文責 3年 中島 典子)

美術工芸研究部会

美術工芸研究部会(鶴鳴会)は美術・工芸の分野をこよなく愛する女性と男性により結成された研究部会です。今年度から活動が始まり、なんとか最初の1年目を乗り切ろうとしているところで。美術工芸研究部会活動の目的は、文化財学科のホームページを見ればわかることなので、ここでは控えさせていただきます。

さて、今年度の活動についてですが、色々な場所に足を運んだと思います。第一回目の見学会は東京国立博物館常設展でした。この時は、院生が展示品の解説を行い、他の来館者の質問にも答えていたという記憶が残っています。次に、ジブリ美術館に行き、宮崎駿ワールドの一部を垣間見ることが出来ました。今思えば、ただ遊んできただけかもしれません。後期に入ってから、11月下旬から12月中旬にかけて見学会が集中して行われました。まず町田市国際版画美術館で明治期の石版画(リトグラフ)展を見たのですが、これには満足しました。数10点の作品の中に一つだけ飛びぬけた美人画があったのです。詳細は言いませんが、男として惚れてしまったぐらいです。もう一度生で見たいものです。その後、2年生による初の企画見学会が畠山記念館で行われ、資料作成及び作品説明一切を任せたとこ、見事やり遂げてくれました。そして、年の最後は修復研究所21で油画修復の現場を見学させてもらい、大変貴重な体験を得ることが出来ました。

今後の活動予定は特に決めていないが見学会をより増やし、それに伴うディスカッションを重点的にやっと思っています。出来れば作品制作・展示が理想です。

(文責 M1 五十嵐 健太)

卒業論文一覧

指導教授：石田 千尋

- ・遠藤ゆかり 「長崎版画にみる異国文化」
- ・荻野 貴博 「幕末における日仏関係—安政2年のフランス軍艦を巡って—」
- ・片桐 有紀 「近世長崎における外来の食文化—卓袱・普茶・煎茶—」
- ・小代田由紀子 「近世長崎における市民と貿易について—宿町・附町の形成と発展—」
- ・田嶋 万葉 「近世日蘭交流に関する一考察」
- ・内藤 沙織 「近世長崎における唐人騒動について」
- ・中本明日香 「近世長崎における遊女と唐・紅毛貿易」
- ・半藤知恵子 「江戸時代初期の幕府政治について—二元政治期の秀忠の存在—」
- ・平田紘太郎 「江戸上級遊女の地位についての—考察」
- ・森田 英治 「横浜開港と関東における商品流通の展開」
- ・数中かおり 「江戸時代における広告事情について」

指導教授：大三輪龍彦

- ・青山 裕美 「近世東海道戸塚宿の役割について」
- ・阿部 潤 「中世前期における僧侶の葬送儀礼について—葬法を中心として—」
- ・稲村 太一 「近世末期におけるえびす講についての—考察」
- ・太田 恵子 「中世和鏡について—羽黒鏡を中心として—」
- ・岡光 美佳 「中世の調理用具について」
- ・小泉 洋子 「国指定史跡「小田原城跡」における保存と活用の実態」

- ・佐々木英明 「中世鎌倉における境界の空間構造について」
- ・佐藤 耕治 「古代・中世の鬼怒川水系における製鉄」
- ・中村 保子 「鉦彫彫刻—東国における23身区を中心に—」
- ・林 裕子 「黒板勝美意見書以後の史跡保存運動の歴史について」
- ・吉留 美紗 「畠山重忠に見る坂東武士像」

指導教授：河野真知郎

- ・阿部万里子 「古人骨にみる先史時代の生活状態」
- ・大輪 芳照 「積石塚再考」
- ・川浪 雄大 「三内丸山遺跡の建物復元をめぐって」
- ・黒川 真里 「駿遠守護今川氏—領国支配とその城郭—」
- ・小菅 史泰 「日本庭園史からみる禅寺庭園」
- ・佐藤 文子 「やぐら研究—形態と機能の検討を軸として—」
- ・鈴木 絵美 「『中世奥山荘』の歴史景観」
- ・竹本 友美 「近世墓標の研究—江戸の墓制と社会背景—」
- ・荷見 忍 「古代『玉』の呪性—『記紀』から読むその強さ—」
- ・宮崎 正二 「鎌倉における中世前期の職人像」
- ・渡邊 徳子 「日本古代の『舟葬』再検討」

指導教授：関 幸彦

- ・井浪 卓洋 「『曾我物語』の周辺—敵討伝説の形成と展開—」
- ・宇田川雅美 「浦安の歴史的沿革—寺社縁起・伝承を中心に—」
- ・榎本純之介 「相馬御厨の歴史的的位置—平安末期・千葉氏の動向を中心として—」
- ・塩谷 賢 「中世平塚宿の歴史的変遷」
- ・下平あかり 「『吾妻鏡』見る垵飯について」
- ・菅原 聡 「『北条時頼廻国伝説をめぐる諸相』—北条氏支配を中心として—」

- ・竹内 一将 「小野道風像の成立と展開—虚像と実像をめぐって—」
- ・田中 孝幸 「常陸国における南朝勢力の盛衰—関一族を中心にして—」
- ・田辺雄太郎 「奥州合戦における軍忠交名の分析—『吾妻鏡』文治5年7月19日条より—」
- ・仲根 麗 「新撰組とその時代—土方歳三を中心として—」
- ・桶川 岳大 「武士道の成立をめぐる諸問題—その時代的変遷—」
- ・譽田 将久 「近世期における密貿易についての—考察」
- ・三俣 欽司 「平安京・検非違使の一考察—追捕活動を中心として—」
- ・持丸 雅子 「畠山重忠・二俣川合戦の諸相」
- ・百瀬 綾乃 「中世における化粧及び化粧具について」
- ・矢野 裕之 「こどもの民俗学—ケの日の子供組について—」
- ・米山 理恵 「南北朝動乱期における武士道について—『竹馬抄』を中心にして—」
- ・渡邊 美帆 「道長政権の成立と展開—女性を中心として—」

指導教授：中里 壽克

- ・明間 美幸 「李朝螺鈿の文様と技法について」
- ・宇佐美和也 「脱乾漆技法について」
- ・栗原あゆみ 「建築における漆芸的装飾について」
- ・佐藤 彰子 「密陀絵技法の研究と再現」
- ・鈴木 一弥 「鞆塗の歴史と技法について」
- ・鈴木 暢歩 「南蛮漆芸の歴史と技法について」
- ・堀田 洋二 「中世の出土漆器に見る印判技法について—中世鎌倉を中心として—」
- ・宮間 成美 「茶道具の裏にみる蒔絵について」
- ・山田 洋 「平文の歴史と技法について」

指導教授：永田 勝久

- ・片桐 健太 「浄智寺下遺跡出土銭貨に関する基礎研究」
- ・唐澤 陽子 「文化財のデジタルアーカイブとその利用について」
- ・佐々木睦子 「絹繊維の劣化について」
- ・長友 純子 「永福寺出土瓦の型式分類について」
- ・星野 玲子 「石の劣化と保存処理」
- ・安田 嘉春 「絹繊維の劣化と電子顕微鏡観察」
- ・山口 隆弘 「和紙の酸性環境下における劣下」
- ・村田 竜太 「出土木製品の保存処理法について」
- ・和田知穂美 「黒曜石の産地同定について」

【卒業生会員について】

文化財学会は、鶴見大学を巣立ち、各地で活躍する卒業生の情報交換の、親睦の場、在校生との交流の場として活用していただきたく、卒業生会員の制度を設けています。

会員になるためには、卒業時に会員の登録を行い、合わせて5年間の会費、5千円を納入して頂きます。5年間、会員の皆様には、総会・講演会・シンポジウム等のイベント情報、会報、さらに将来は会誌等を郵送いたします。6年目からは、年会費を振り込んでいただきますが、もし手違いで未納の場合も3年間は、情報の提供をいたします。3年間、会費未納の場合は継続の意志がないものとして、自動的に退会の手続きを取らせて頂きます。

また、住所変更等につきましては、学会宛に御一報下さい。この変更は、文化財学科のホームページ上でも受け付けます。

卒業生の皆様の御入会と、今後文化財学会を広くサポートしていただけることを御願い申し上げます。

- 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集発行
 - 4 親睦その他の事業
 6. 本会に次の役員を置く。
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
 7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに当てる。
 8. 本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。
- 付 平成11年10月16日から発足する。

平成15年度の年間行事予定

文化財学会総会及び春季大会

日 時 6月7日（土） 午後1時から
 会 場 鶴見大学会館メインホール
 講演者 上横手雅敬氏「論題未定」

文化財学会秋季シンポジウム

日 時 11月8日（土） 午前11時から
 会 場 鶴見大学会館メインホール
 テーマ 永福寺をめぐる諸問題

編集後記

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦はかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表

私たち1年生は去年の春、先生から依頼され学会委員の一員になりました。最初は突然のことに戸惑いましたが、先生や先輩方の心優しいご指導のおかげで、1年間活動することができました。特に、春・秋季大会では先輩たちと話し合い協力しながら準備をし、成功に導けたことにとっても充実感をもてました。また、今年度は部会の数も増え、活動も活発になったので来年度は更なる発展に向けて私たちも協力していきたいと思えます。1年間の仕事を通じてたくさんの喜びがありました。また文化財学科の一員としてとてもよい経験になりました。1年間ありがとうございました。

（編集委員）

鶴見文化財学会報 vol.4 訂正とお詫び

鶴見文化財学会報 vol.4 に下記の誤りがございました。訂正をしてお詫び致します。

記

- ・ P1 「考古学と文化財学のはざままで」

誤：文化財学会秋期シンポジウム

正：文化財学会秋季シンポジウム

※同文章内で同じ誤りが数箇所あるため、併せて訂正致します。

- ・ P5 「学会右見左見 文化財学会参加にあたって」

誤：平成 13 年度秋期シンポジウム

正：平成 13 年度秋季シンポジウム

以上

また、非常用的な言い回し、漢字などは執筆者の表現を尊重するため、発刊した時の文章のままで掲載させていただきます。ご了承ください。